

長岡京跡右京第1277次調査現地説明会資料

1 はじめに

本調査は、平成 11 年度から断続的に実施されている JR 長岡京駅前線拡幅工事に伴う事前の発掘調査です。調査地は、長岡京右京六条二坊十四町および六条条間小路推定地、旧石器時代～縄文時代および古墳時代と平安時代～近世の複合遺跡である開田遺跡にあたります。調査地付近は西から東へと傾斜する緩扇状地に位置します。

これまでの調査では、六条条間小路南側溝が継続して検出され、平成 29 年度に実施された長岡京跡右京第 1159 次調査では、六条条間小路と西二坊坊間小路の交差点が検出されています。また、同調査では六条条間小路南側溝から墨書人面土器に採用される壺 C やミニチュア土器、土馬などが出土しており、祭祀の痕跡がみられます^(注1)。令和 3 年度に実施された右京第 1255 次調査でも六条条間小路と西二坊坊間西小路の交差点が検出され、六条条間小路南側溝から土師器の杯や皿や須恵器の杯蓋、土馬が出土したほか、交差点路面を大きく掘削する平安時代の遺構とみられる溝が検出されました。⁽²⁾

また、本調査地周辺の調査には、南約 80m の地点で昭和 62 年度および平成 12 年度～平成 13 年度に実施された長岡京跡右京第 268 次調査⁽³⁾ および右京第 667 次調査⁽⁴⁾ があります。布留式土器を含む古墳時代の流路および土器埋納土坑などが検出されており、土師器、須恵器、銅製耳環などが出土したほか、長岡京期の整地層も検出されました。さらに、水路を挟んだ北側隣接地では平成 3 年度に右京第 379 次調査が実施され⁽⁵⁾、古墳時代の掘立柱建物のほか、鎌倉時代の溝や座棺墓とみられる土壇墓群が検出されました。出土遺物は古墳時代の溝から平安時代の土師器や須恵器、黒色土器、鎌倉時代の瓦器椀などが共伴して出土したほか、氾濫堆積層からも平安時代の土師器皿、須恵器杯・椀、灰釉陶器壺と鎌倉時代の瓦器椀が出土しました。よって、本調査区においても古墳時代、長岡京期および中世の遺構が展開しているものと想定されました。

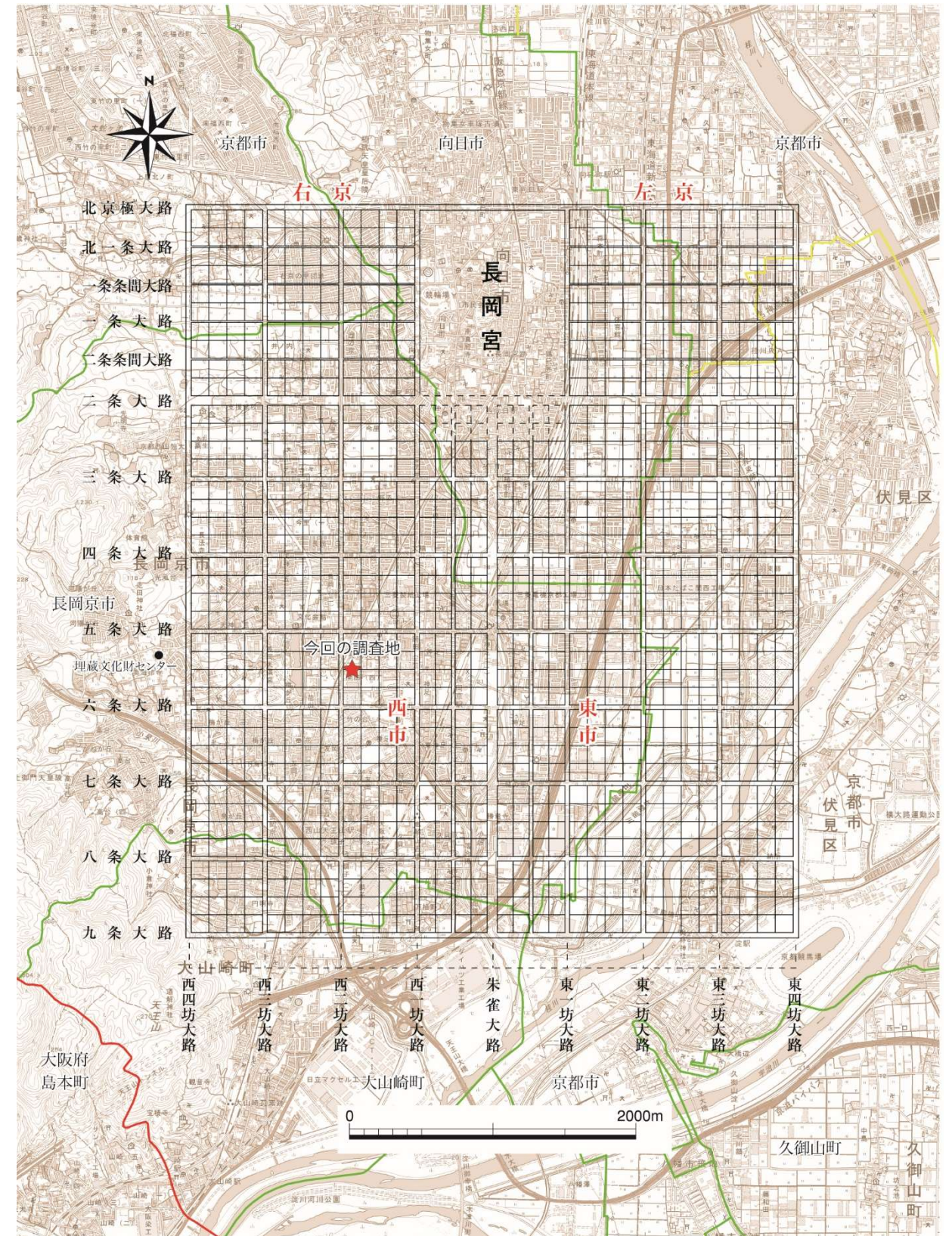
調査期間：令和5年6月5日～9月7日（予定）

調査面積：約 798 m²（予定）

本調査は第1調査区と第2調査区に分かれる。

第1調査区：令和5年6月5日～6月19日（終了）

第2調査区：令和5年6月19日～9月7日（予定）



第1図 調査区位置図

2 調査の概要

本調査および昨年度実施した右京第 1262 次調査では奈良時代から中世に至る遺構や遺物を検出しました。以下に本調査の第 2 調査区と右京第 1262 次調査の第 1 調査区における主な遺構を紹介します。ただし、遺物整理作業中のため詳細な時期が不明なものもあります。

中世

① 中世耕作溝

地表面下約 1.4m で中世の耕作に伴うとみられる溝跡が多数検出されました。南北方向の溝で、埋土からは土師器片等のほか瓦器の細片が出土しました。

平安時代

① 落ち込み SX126221・SX127725

本調査区北東部および右京第 1262 次調査第 1 調査区北西部で検出した落ち込みで、いずれも南辺のみを検出し、全体の規模は不明です。右京第 1262 次調査で検出した SX126221 は北西－南東方向の方形を呈する落ち込みのようにも見え、検出し得た範囲は南西辺が約 7.0m、南東辺が約 6.0m を測ります。いずれも約 1.52m～2.0m ほど内側でほぼ垂直に落ち込み、最大深は約 1.3m を測ります。上半部約 0.6m は褐灰色～にぶい褐色の砂質シルト層が堆積し、下半部約 0.7m は褐灰色シルト質粗砂～砂礫が堆積します。ため池か流路とみられます。最下層部から長岡宮式軒丸瓦の瓦当部（写真 1）が出土しました。ただ、当該遺構は六条条間小路の道路範囲内に位置することから、平安時代以降の遺構であると考えられ、瓦器等の顕著な中世遺物が出土していない点も考慮し、平安時代の遺構と想定しました。

② 溝 SD127726

本調査区全域で検出した北西－南東方向の溝です。幅約 2.0m、深さ約 0.2m を測ります。埋土は黒褐色砂質シルトでした。右京第 1262 次調査第 1 調査区西壁において条坊側溝よりも上層に位置し、かつ中世の耕作溝に切り負けることから平安時代の遺構と想定しました。

長岡京期

① 六条条間小路南側溝 SD126214・SD127712

本調査区および右京第 1262 次調査第 1 調査区で検出した東西方向の条坊側溝です。右京第 1262 次調査第 1 調査区西壁では幅約 1.5m、深さ約 0.2m を測り、埋土は褐色砂質シルト混じりの灰褐色砂質シルトでした。溝底の標高は右京第 1262 次調査第 2 調査区で約 20.9m を測り、同第 1 調査区西壁では約 20.8m を測ります。このため、当該調査区域においては西に向かって傾斜しているとみられます。

奈良時代

① 溝 SD126223・SD126228

右京第 1262 次調査第 1 調査区で検出した北東－南西方向の溝です。溝 SD126223 は幅約 1.0m、深さ約 0.4m を測り、六条条間小路南側溝 SD14 に切られます。埋土は概ね上部の灰褐色砂質シルト層と下部の黒色シルト層に分かれ、灰褐色砂質シルト層からは軒丸瓦の瓦当部が出土しま

した（写真 2）。この瓦は乙訓寺創建期軒丸瓦に類するものとみられます。溝 SD126228 は幅約 0.8m、深さ約 0.3m を測ります。溝 SD126223 に接続し、北側へ抜けていないことから、溝 SD126223 から分岐したものと考えられます。切り合い状況から溝 SD23 より後に形成されたとみられ、なんらかの理由で溝 SD126223 が分岐部分から付け替えられたとみるのが穏当でしょう。

② 溝 SD126224

右京第 1262 次調査第 1 調査区南西部で検出した北東－南西方向の溝です。溝 SD126224 部は最大幅約 1.0m、溝 SD126223 との接続部で深さ約 0.3m を測ります。SD122730 の南東延長線上に位置しますが、検出範囲の中ほどでクランクがあり、深さは約 0.1m まで浅くなるため別遺構としました。六条条間小路南側溝 SD126214 に切られており、かつ切り合い状況から溝 SD126223・SD126228 より新しくみえます。溝 SD126228 以南へは抜けていません。

古墳時代

① 溝 SD126230

右京第 1262 次調査第 1 調査区南西部で検出したコの字状の溝です。最大幅約 0.8m、深さ約 0.2m を測ります。褐灰色砂質シルトないし黒褐色砂質シルトの埋土より土師器の壺とみられる底部が出土しました。出土遺物から古墳時代前期にまで遡るとみられ、検出状況から方形周溝墓の周溝の可能性がありま

弥生時代

② 溝 SD126225・SD127724・SD127730

本調査区北東部および右京第 1262 次調査第 1 調査区西端部で検出した、方形区画溝群です。SD126225 部で幅約 1.0m、深さ約 0.3m を測り、底部は箱型を呈します。右京第 1262 次調査第 1 調査区西壁の土層断面より六条条間小路南側溝 SD126214 および溝 SD126224 より古いと判断されます。埋土は概ね上部の黒褐色砂質シルト層と下部の褐灰色砂質シルト層に分かれ、褐灰色砂質シルト層より弥生土器の壺とみられる口縁部が出土しました。弥生時代末頃の遺構とみられ、方形周溝墓群が展開していた可能性があります。

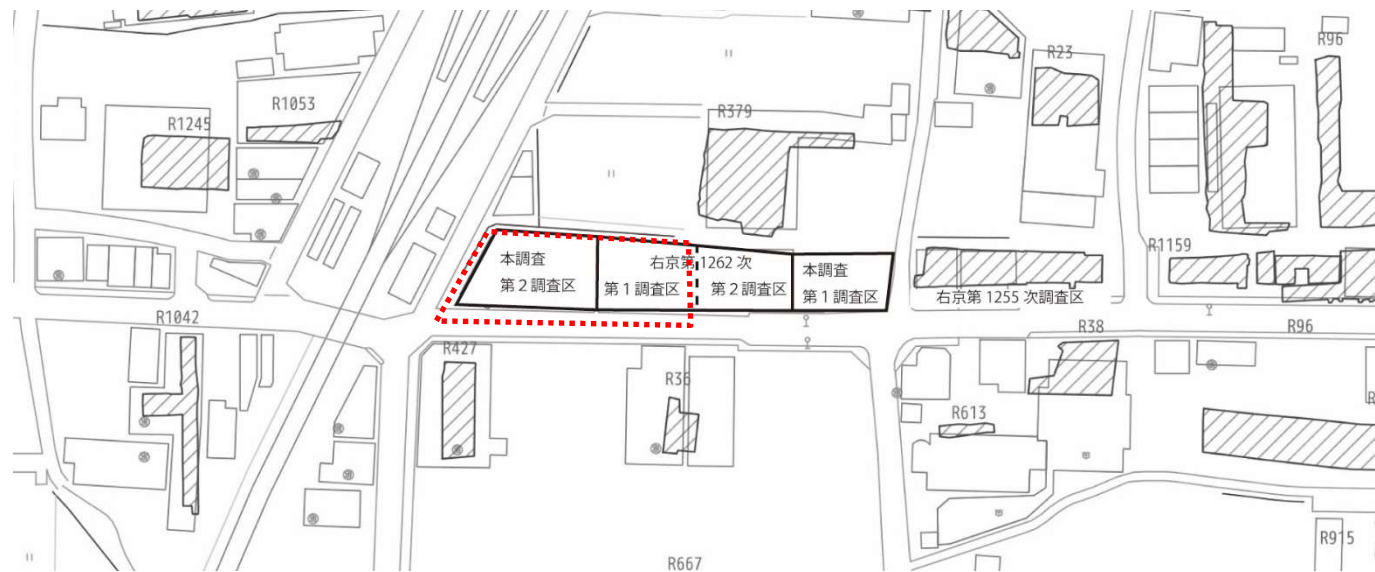
3 まとめ

今回の調査では、主に奈良時代～中世の状況を知る手掛かりを得ることができました。以下に主な成果をまとめます。

- ① 中世期は耕作地として利用されていたとみられます。耕作溝が南北方位に合致しており、旧条坊による方形区画の認識がこの時期まで継続していたと考えられます。
- ② 平安時代には旧六条条間小路道路面に大規模な落ち込みが形成されていました。埋土の堆積状況より水流の痕跡が認められますが、埋没過程において池沼化したものとみられます。ため池のような施設であった可能性もあります。右京第 1255 次調査においても、旧六条条間小路と旧西二坊坊間西小路の交差点付近で当該期の大規模な落ち込みが確認されており、道路としての機能は失われていたと考えられます。

- ③ 長岡京期には六条条間小路が敷設されており、南側溝が検出されました。溝底の標高より、本調査区域においては西に向かって傾斜していたものとみられます。なお、右京第 1255 次調査で検出された六条条間小路南側溝の溝底は約 19.2m であり⁽⁶⁾、本調査区付近と比べ約 1.0m の高低差があります。六条条間小路南側溝の溝底が右京第 1255 次調査区以東は東に向かって傾斜することから、本調査第 2 調査区付近に分水嶺および急傾斜地があったと想定されます。右京第 1255 次調査の六条条間小路南側溝からは土師器および須恵器の杯や皿、甕などが出土しており、生活の痕跡がうかがえますが、本調査区域では条坊側溝からほとんど遺物が出土しませんでした。
- ④ 奈良時代には北東―南西方向の直線的な溝が形成されていました。直線的かつしっかりとした造りで、非常に計画的な区画を構築していたものとみられます。また、出土した軒丸瓦は乙訓寺から出土した軒丸瓦と類似しており、これまで想定されていなかった長岡京期以前の古代寺院の存在を示唆する点においても注目される遺構です。
- ⑤ 古墳時代については右京第 1262 次調査地においての方形周溝墓の周溝とみられる遺構を検出しました。古墳時代前期の遺構と考えられ、後述の弥生時代の土地利用を踏襲していた可能性があります、注目されます。
- ⑥ 弥生時代については方形周溝墓群とみられる遺構を検出しました。弥生時代末頃の遺構と考えられます。本調査地の西側には弥生時代後期の集落遺跡である開田城ノ内遺跡が展開しており、その縁辺部に形成された墓域にあたる可能性があります。

注 1) 岩崎 誠・福家 恭「右京第 1159 次（7ANKNT-13 地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 29 年度 2019
 2) 山下 研「右京第 1255 次（7ANKNT-15 地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』令和 3 年度 2023
 3) 岩崎 誠「右京第 268 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和 62 年度 1989
 4) 中島皆夫「右京第 667 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 11 年度 2001
 5) 岩崎 誠・中島皆夫「右京第 379 次調査概報・第 91132 次立会調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 3 年度 1993
 6) 2) に同じ。



第 2 図 調査区配置図



写真 1 落ち込み SX126221 出土軒丸瓦



写真 2 溝 SD126223 出土軒丸瓦



写真 3 右京第 1262 次調査第 1 調査区遺構検出状況（東から）